

子どもの性暴力被害 望まない妊娠

望まない妊娠をテーマにした絵本「はなれるいのち」と「宿るいのち 遊ぶいのち」



性暴力被害に遭った子どもたちのために、望まない妊娠を題材にした2冊の絵本を、名古屋市の被害者支援団体が出版した。物語に自らを投影することで、つらい思いを整理する一助にしてほしいと制作。本人の気持ちに寄り添うきっかけにと、周りの家族や教育者、医療者らにも活用を促している。

(植木創太、昆野夏子)

つらい思い 寄り添う絵本

絵本「はなれるいのち」

は、性暴力を受け妊娠した主人公の動物が、悩んだ末におなかに宿った命と別れるまでの物語。主人公が「生理が来ない」などと一人で悩んでいると、青い鳥が登場して手を差し伸べる。周囲の支えに気付いてもらうのが狙いだ。

もう一冊の「宿るいのち 遊ぶいのち」は、命が宿り、離れていくこの意味を温かな言葉と絵で伝える解説書。中絶という選択もあることも描き、悩む若者に「純粹に命について考えてみて」と呼び掛ける。

いずれも、性暴力被害者を支援する一般社団法人「日本フォレンジックヒューマンケアセンター」が一月に出版。日赤愛知医療センター名古屋第二病院(名古屋市昭和区)内で運営する「性暴力支援センター」日赤なごや「なごみ」の現場から「子どもと一緒に読め、会話のきっかけとなるものを」との声を受けて企画

支援団体出版「とても身近な問題」

性暴力の被害者も加害者も出さないための教育をどう進めるか。各地で模索が続いている。

愛知県豊橋市では1月、性教育イベント「ユースウィーク」を開催＝写真。市中心部の図書館で5日間、医師や助産師らが若者の性の悩み相談に応じた。訪れた女子高校生(16)は「生理のことを医者相談していいなんて知らなかった」。性感染症のチラシを手にとった男子大学生(21)は「性行為や避妊は友達の話やアダルトビデオの情報に頼りがち。科学的に知ることが大事と分かった」と話した。

科学的な知識 大切 性教育模索



企画した産婦人科医の宮本由記さん(44)によると、日本は性に関することをタブー視する雰囲気強く、欧米に比べて性教育が遅れている。「学校や行政、病院などが連携し、科学的な知識を提供することが大事。若者が気軽に相談できる場も必要だ」と訴える。

し、活動に協力する保育士らが挿絵を手掛けた。なごみでは二〇一六年の開設以来、被害者や家族らから八千件以上の電話相談を受

け、八百人超と面談した。法人副会長で日本福祉大教授の長江美代子さん(58)は「性暴力の被害に悩む子どもは一般の人が思うよりずっと多く、とても身近な問題」と話す。心的外傷後ストレス障害(PTSD)で社会生活を送れなくなっている子も。「被害を

言い出せないケースも多い。だからこそ、寄り添う人がいると思える仕掛けが必要」と力を込める。絵本は当初、センターで使う分だけを自作する予定だったが、各地の支援団体から提供の要望を受け、出版を決意。各千部を作り、一般販売も始めた。

「大人こそ読んで」

性暴力被害者支援看護職「SANE(セイン)」で絵本を監修した江口美智さん(56)によると、子どもの望まない妊娠は、自身の状況が理解できないまま、周囲の求めで中絶する事例も少なくない。「多感な思春期の思いに共感してくれる大人が身近にいると、その後の人生が大きく変わる。家族や友人、教育者、医療従事者など支える側にこそ読んでほしい」

「はなれるいのち」は千九百八十円、「宿るいのち 遊ぶいのち」は九百九十円。いずれも医療系出版社「ともあ」電話052(325)6618のオンラインショップなどで購入できる。